

# Europe 音楽学校 名門校を訪ねて

——パリコンセルヴァトアール、パリ国際音楽大学、  
ウィーンアカデミー、プラハアカデミー——

## ◇社会のニーズに応える ウィーン国立音楽院

福田 靖子

昨年(1990)の11月、全日本ピアノ指導者協会メンバーとともに、音楽学校の名門校といわれる、パリ国立音楽学院、パリ国際音楽大学、ウィーン国立音楽アカデミー、プラハ国立音楽学院を見学しました。

この旅行の目的は、わが国の音楽大学との比較が少しでもできるならばと思ったからです。実際にそれらの学校を見学してみて、想像以上にわが国の音楽大学とは、違っていることに驚き考えさせられました。

ともかく、実社会に即した学校行政をしているという感を深くして帰ってきたのです。

わが国の音楽大学の例ですと、まず「ソリスト養成のための技術の修得」ということが前提となっているような学部の設定であり、教育内容をもっており、社会のニーズに即した教育がおこなわれていません。

ウィーンアカデミーの例をとみましょう。ここには10の学部があり、第1部は作曲、第2 鍵盤楽器部、(ピアノ科、チェンバロ科、オルガン科)室内楽や声楽の伴奏としてピアノ科(日本にはこの科はない)、などが含まれています。第3弦楽器の部、ここではヴァイオリン、ヴィオラ、コントラバスはもちろんのこと、ハーブ、ギター科があります(わが国ではギター科を持つ音大はない)。第4管楽器の部、フルートとかホルンなど木管



世界の名教授ザイドル・ホッファー教授の個人レッスンを見学、偶然に日本人留学生が受けていた。

ウィーンアカデミーに於て



パリコンセルヴァトアール副学長ド・ブッス氏と筆者  
管楽器の各科、第5教育の部、この部は2つに別れていて、第1部は学校教育教師、例えば高等学校での音楽を選出した学生を指導できる教師の養成なのです。第2部はピアノやヴァイオリンなどプライベート教授ができる教師の養成を目的としています。わが国では音楽大学で声楽を学ぼうが、管楽器、作曲、ヴァイオリン等の学科を卒業しようがピアノのプライベート教師になるのが90%をしめているにもかかわらず、この部に相当するプライベート教師を養成する科がないのです。

第6は教会音楽の部、カトリック、プロテスタントなどの教会での音楽司祭ともいえる人を養成しており、第7は声楽の部、ソロ、オペラ、合唱の部の各科、第8はバレエの部、ヨーロッパでは各音楽学院にバレエの部がありますが日本ではバレエ科のある音楽大学はありません。第9、第10社会音楽部というようなもので、日本では絶無、例えば音色の研究、マネージャーを育てる、また電気、電子楽器の科、音楽調査士というようなものを養成する科があります。

これらのことをみても、いかに音楽教育が社会のニーズ(必要性)にのっとっておこなわれているかご理解いただけたと思います。日本の行政官がこれらの学科について調べに来たことはないという答でした。ともかく日本は今や音楽教育においても大改革が必要な時期にきているのではないかと痛感した次第です。(転載)



パリ国際音楽大学々長リヒャパン教授のレッスン、通訳は北川正教授がして下さった。

## ☒ 多い留学生に当惑

赤平 怜子

今回のパリのコンセルバトワール、パリ国際音楽大学、ウィーン国際音楽院、ブラハ音楽アカデミーの4つの音楽大学を訪問(11月17日—26日)する機会を得ました。直接レッスンを見学教授の方々とのディスカッション、また日本から留学している学生たちと話し合いの場を持つことが出来ました。

ブラハを除いて、ウィーンもパリもとても日本からの留学生が多いということです。ウィーンでは、ザイドルホフナー教授のピアノレッスンを見せていただきましたが、ちょうどその日のレッスンはすべて日本人で、何だか日本にいてレッスンを見ているようでした。留学生の多いことは話には聞いていましたが、実際のところ、ビックリいたしました。日本人は指はよく動くが、音楽の心が無いと言われていました。私が見学したレッスン風景もひたすら音楽の内容を作る問題をやっていました。また、音には色があると言われていますが、この音色の問題もとても大切なことだと思います。私も音色や音楽の表現の問題にはとても興味を持ち、子供たちの発表会やおさらい会をたくさん聴いて歩いていますが、ただロボットのように指を動かす子供はたくさん見ますが、本当に自分の弾いている音に耳を傾け考え、1音たりともむだにしないで真心から弾いている演奏は少ないように思います。これは教える教師側の方にも責任があるように思います。確かにヨーロッパは日常生活の中にたくさん音楽があります。町には立派な教会が立ち並び、歩道教会の中に足を踏み入れますと、賛美歌が聞こえ、美しいステンドグラスに目を見は



### ベートーベンのお墓の前で記念撮影

ります。日ごろ、教会とあまり縁のない私でも、ひざまずいてお祈りをせずにはいられない心境になります。町の建物を見ても、景色を見ても、博物館の絵を見てもすべてが音楽と通じるようです。

ちょうど私の後輩に当たる国立音大ピアノ科を卒業して、留学していた学生さんと会いました。彼女の場合は春には日本へ帰るといっていますが、就職の場がなく、どうしたらいいか困っていると話していました。人にもよるでしょうが、ハッキリ2年とか4年とか期限をつけて勉強にきた方が身につくと話していました。また一旗揚げるまでは絶対日本には帰らない。もう6年も日本に帰っていないという男の作曲科の学生もおります。向こうの方と結婚し、勉強はあきらめてガイドをやっている方もおりました。ウィーン国立音楽院の学長も言っていました。音楽の最終目的は豊かな人間性を育てることだと思います。思いやりのある素直なやさしい気持ちがあって初めてすばらしい音楽が生まれます。今は教育ブームといましょうか、やれ「国立有名校だ」「医学部だ」と勉強さえできればいいというような、人間性を無視した感じがあります。とても残念です。

ウィーン国立音楽院からは毎年、多くの卒業生が出ます。しかし、たいへんな就職難だということです。まして数多い留学生の中からピアニストとして生きていける人は、ごくまれだということです。他はほとんど楽器店でピアノ講師をしたり、自宅で教えています。教育の場合は、しっかりした技術の上に、豊かな人間性、教師自身の生き方、子供の性格を的確につかみ、いかに引っぱっていか、また音楽の内容表現、音色をいかにわかりやすく子供に教えられるか、などの指導力が大きくものをいってきます。自分で考え、努力し、勉強してヨーロッパへ行ったのでしたら、それだけのものがかえってくるでしょう。なかには、ヨーロッパへ行けばなんとなくピアノが上手になると安易な気持ちから留学している生徒もいるそうです。

日本にいても、ヨーロッパにいても、一生懸命生きようと思う場合には、周りから答えがはね返ってきますが努力せずして何かを得ようとする場合には、道は開けないということを改めて感じました。(東奥日報より転載)



ロンドンにて 中央が筆者。2階バスも見える

## ◇世界の銘器ウィーン・

### ベーゼンドルファー ピアノ工場を訪れて

松口 雍子

全日本ピアノ指導者協会主催「パリ・ウィーン・プラハ音楽院訪問の旅」に参加、その間を縫って、ベーゼンドルファーピアノ工場を見学してまいりました。

といいますのは、数年前にこのピアノが我家にはいるその豊かな音色に触れるたびに、幸せな思いに浸ることが出来、一度作られているところを見たいと思っていたからです。

その日は午前9時半からウィーン・アカデミー訪問の予定になっていますので、その前に午前6時半に訪問のアポイントメントをしていました。(会社は7時、工場は6時半～夕方4時まで)日本では考えられない時間の訪問なので、一抹の不安をいだいて行きますと、灯がついていて一安心、その上、社長のレドラー氏が出迎えて下さり、工場まで御自分で運転して案内して下さい等、日本では考えられないことばかりでした。ピアノの暖かい音色の秘密の一端がこういうところからも、うかがわれる思いをして工場に到着。



れる思いをして工場に到着。

工場は話には聞いていましたが、古色蒼然としていてこれまたこういうところで、ウィーン音楽文化のシンボルと言われる伝統を守る銘記が作られるのだろうか、一見不思議な気持ちになったものです。

ブラハアカデミー教授クラーシュ氏と、プロコフィエフを始めとする難曲の数々を演奏し聴かせてくださった11才の天才少年。

工場の中は工場長が案内して下さいました。一台のピアノが一年がかりで、しかもほとんど手作りで出来るということを知り、その手作りの魅力と音色にひかれ、買い求めたのですが、全くその通りでした。木工作業もコツコツと造り上げられ、一つ一つの部品も丁寧に能率的という言葉とは無縁な態度での仕事振りで、これでは一台のピアノも一年がかりで出来るということもうなずけました。楽器は人間の手と魂で造り上げるものであるという伝統が生き続けているようです。社長が私のピアノナンバーからどのチーフが作ったものか、調べて知らせて下さいましたので、製作者との御対面となった次第



ベーゼンドルファーピアノ本社にて 社長レドラー氏を囲んで、帽子をかぶっているのが筆者。壁にはベーゼンドルファーピアノを求めた世界のピアニストのサイン入り写真がかざってある。日本のピアニストでは、児玉幸子・邦夫氏を始めとし、3、4名の名が見られた。通訳は、写真左2人目、小西さんがして下さいました。

です。一緒に記念の写真が出来、うれしい思い出となりました。

最後にレドラー社長から会社の説明です。戦前の全盛時代最も多い年で月産30台を越したことはなく、長年月産20台以下、需要が多くなり月産数を多くしてみたが、職人はすぐには育ちにくいもので、質を落とすよりと、又、生産数をもどしているという。こういう態度は伝統を尊ぶウィーン気質をそのまま表わしていると思います。

三度目のヨーロッパなのですが、11月というシーズンは初めてだったからでしょうか。今回は特に風土と音色、気質と音色といったことをつくづく感じました。

1. パリとウィーンの両オペラ座の最高席で聞いたオペラの楽しさ、オーケストラの響き。
2. ウィーンアカデミー、ザイドルホーフ教授のベートーヴェン、告別ソナタ第1楽章のレッスンの音色。
3. 幸せにもゲネプロ(練習)を聴いた、ウィーンフィルオーケストラの響き。
4. プラハ・スメタナホールで聴いた、ベートーヴェン弦楽四重奏 op. 32の弦のきびしい響き、など、音色について特に印象深いものがありました。

帰国しまして、美しい音色のベーゼンを弾く時、ベートーヴェンハウスのあるカーレンベルクのなだらかな丘陵、そこから眺めるウィーン市街、ゆったりと流れるドナウ川、そして社長レドラー氏の暖かいおもてなしが思い出されてまいります。



ウィーンアカデミーの学校説明をして下さるシュベルト博士(女性)と、ヴァイスマン教授。通訳はこの旅行の為お骨折をして下さいました藤谷節子さん(日本では児玉邦夫氏師事)に、長岡直子さん(毛藤美代子氏師事、シュベパノフコンクールに1位)も加わった。